助成事業

「経済的困難を抱える子どもの学び支援活動助成」「重い病気を抱える子どもの学び支援活動助成」について、各地域で子ども支援に取り組む団体への助成支援を実施しました。

経済的困難を抱える子どもの学び支援活動助成

経済的困難がもたらす あらゆる格差に根本的な解決を

経済的な困難を抱える多様な子どもの課題に対して、支援団体の事業基盤の強化や新たな事業へのチャレンジなど、中長期視点で課題に取り組む団体の活動に対して、最大3カ年の助成を実施しています。複数年助成を開始した3年間で、20団体を支援しました。

》支援事業例

- 学習支援
- 学びの意欲向上
- 子どもの居場所
- 外国ルーツの子ども
- 訪問支援
- 支援基盤整備

領域全体の現状と課題

子どもたちは、教育や体験の機会に乏しく、地域や社会から孤立しがちで、様々な面で不利な状況に置かれています。子どもの困難さも多様化、複雑化していること、また地域ごとに課題の特徴や深刻さが異なることから、地域全体での支援が求められます。

※1 出典：「国民生活基礎調査」（厚生労働省）
※2 出典：「外国人の子供の就学状況等調査（令和３年度）」（文部科学省）
※3 出典：資料集「社会的養育の推進に向けて（令和４年３月31日）」（厚生労働省）

子どもの貧困 約7人に1人※1

外国ルーツの子ども約13万人※2

社会的養護児童 約4万2千人※3

経済的困難を抱える子どもの一例

外国ルーツの子どもの一例

外国ルーツを持つ子どもが直面する問題の一つは「日本語の習得」です。日本語が十分ではないため、学習内容を理解できず学習意欲を失ったり、友達とコミュニケーションをとることができなかったりして、不登校になるケースも見られます。また、ダブルリミテッド（二か国語以上話すことができるが、どの言語も適切なレベルに達していない状態）が原因で、学力不振や、親子の会話が深められず家庭での関係性を構築できないなどの支障が発生します。

社会的養護の子どもの一例

経済的困難を背景とした虐待などにより社会的養護の対象となった子どもは、適切な養育が受けられなかったことにより生じる発達のゆがみや心の傷を持つことで、自己肯定感が低いケースがあります。
自己肯定感を回復させるには特定の一貫した大人による継続的な個別支援が必要ですが、職員不足により十分な支援ができていないケースも見られます。

子ども支援の展望

信頼できる人と居場所で子どもを孤立させない 地域資源を活用した支援を

多様な「学び」、安心できる「居場所」を提供

経済的困難を背景に、教育や体験の機会が乏しいとされている子どもたちには、教科学習の支援だけではなく、探究活動やスポーツ、文化体験など多様な「学び」の提供が重要です。また、地域から孤立せず、自己肯定感を養うための「居場所」の存在も欠かせません。地域セクターが連携・協力して地域全体で子どもを見守り育てる支援が全国的に広がっています。

CASE 01

一般社団法人 ユガラボ 》居場所と学習支援

- 学習支援
- 子どもの居場所

「ゆがわらっことつくる多世代の居場所」は、子ども達の「本音で語り合いたい」「安心してありのままでいられる場所がほしい」という願いから生まれました。2016年に開設し、子ども宅食便や多様な学びイベント、個別学習支援などを実施しています。コロナ禍では、オンラインの居場所も開設しました。また、中高生が落ち着いて学習できる拠点を新設するなど支援が広がっています。多世代の人々がそれぞれの持ち味を発揮し、共創できる場づくりを通じて、誰もが自分の可能性を信じ、挑戦し、応援しあえる社会の実現を目指しています。

持続可能な支援を

→運営資金調達や人材育成などの団体基盤強化

→地域ネットワークによる支援モデルの確立へ

団体の活動が地域に根付き持続していくためには、安定した運用基盤を確立する必要があります。ファンドレイズやスタッフの質向上は、短期間ではなし得ません。中長期視点で自立的な事業継続・発展を目指すために、計画的に運営基盤を強化することに取り組み、持続可能な支援を可能にします。

CASE 02

特定非営利活動法人 HUG for ALL 》組織基盤強化

- 基盤整備支援

「すべての子どもが安心できる居場所を持ち、生きる力を育むことができる社会をつくる」ことを目的に、児童養護施設で暮らす子どもたちの学習・体験・進路支援を行うHUG for ALLは、本助成を活用して事業を継続的に安定して運用できる組織基盤強化を実施しました。
1年目：スタッフを組織化しチームごとに事業を推進。寄付基盤整備（寄付者へのお礼レター発送等）を実施。目標寄付額達成。
2年目：団体サイトの改定やSNSを活用した広報を開始。ボランティア希望者の自然流入が増えるなど、団体発信力の強化を実現。
3年目：広報チームを立ち上げ、SNS更新やイベントの定期開催を実現。社会的養護の課題や団体の認知向上の基盤整備を完了。

サイト改定後、ボランティアの自然流入が増加！

先駆的な取り組みや成功事例を全国へ：
ベネッセこども基金MeetUp開催

MeetUpの詳細は【特集1】P3

※各団体の活動内容は、ベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。

経済的困難を抱える
子どもの学び支援活動助成

活動団体紹介

特定非営利活動法人
シェイクハンズ

所在地：愛知県

学習支援教室を実施しながら生きる力をつけるための子ども農園を実施。地域を巻き込み、農福連携のコミュニティ農園に発展させた。また子どもネットワーク会議を運営し、地域の支援力を上げる活動も実施。

外国ルーツの子ども

活動内容

ネットワークを作り、地域性を生かして生きる力を育む場を作りあげた3年間のあゆみ

2019年に始まった、複数年助成という枠組みの「経済的困難を抱える子どもの学び支援活動助成」の第1期3か年が終了しました。複雑化する子ども支援の課題解決は単年度では難しいことが多く、複数年じっくり腰を据えた計画と支援が必要だと考えたことから始まったこの枠組み。途中コロナ禍など想定外の困難もありながら、子ども支援の課題解決に向き合い、成果を積み上げてきた3年間の一例をご紹介します。

課題

- 貧困率の高い外国人散在地域
- 支援の不足から子どもと家族が孤立
- 学びと社会的体験の不足

解決策

事業名：
生きる力を育む学びの場と尾張北部地域の子ども支援ネットワークづくり

- 学習支援の居場所に加え、内発的な意欲を引き出す体験を通して生きる力を育む場を地域性を生かして作りたい
- 同様の支援団体とネットワークを作り、地域全体の支援の底上げをしたい

2019

農業体験

農園体験で子どもに意欲を

日本語や勉強がつらくても、みんなで作る畑は楽しい！

【工夫点】
- 耕作放棄地を子どもコミュニティ農園に
- 学習支援に来ている子がお世話

【成果】
- 畑仕事が学習支援教室へ来るモチベーションに
- 作物を市場で売る社会体験も

ネットワーク

外国ルーツの子を地域で育てるネットワーク作り

- 国際交流団体や子育て団体に声をかけ、10団体と行政担当者でネットワーク会議スタート
- 様々な問題の解決スピードや解決策が増えた

2020

農業体験

子ども・家庭　と地域がつながる

【工夫点】
- 地域、家族の巻き込み

【成果】
- 地域の方が農業指導をしてくれたり、通りすがりの方が声をかけて顔見知りになったり自然な交流が生まれた
- 畑仕事や料理など、子どもだけでなく、家族とのつながりもでき、地域社会の一員に

ネットワーク

団体を超　えてノウハウ共有

- 多文化共生フォーラムin尾北」開催
  課題、各団体の事例･ノウハウ共有

顔が見える関係性で、　団体を超えた協働が進む。

Interview

特定非営利活動法人
シェイクハンズ代表
松本里美

3年間を助走期間として、さらなる課題解決へ

一つの学習支援教室から、農園を中心にした子ども、家族、地域が自然と交流する地域を作ったシェイクハンズさん。一地域にとどまらず広域のネットワークも3年間で確立し、ノウハウや人材を交流することで地域全体の支援の底上げも実現させました。
助成終了後の2022年からは新しく広い拠点に移り、課題と成果を共有している市とも連携しながら、次なる課題と捉えている低学年の初期指導に力を入れようとされています。

コロナ禍で、オンラインになったことで広がったネットワークも。

2021

農業体験

居場所と学習支援の相乗効果で「学び」に成果

【工夫点】
- 行政と連携し
  大人向け多文化農園に拡大

【成果】
- 農園が口コミで広がり、自然な広報ツールに
- 団体の認知も拡大し、支援者が増加
- 居場所づくりと学習支援の相乗効果で進学率などの成果につながった

今では大学からの体験や、ボランティアの広がりも

ネットワーク

支援者が拡大し、地域全体の支援力アップを実現

- ネットワーク会議に他地域や県外の先進団体も加わり、情報交換・人材育成の場に
- フォーラム第二回を実施。ノウハウ共有の拡大
- 学校関係者によるボランティアなど、支援者･理解者が拡大
- 支援の空白地域にも、新たな団体が立ち上がった

重い病気を抱える子どもの学び支援活動助成

病院、学校、支援団体とともに学びや体験のモデルづくりへ

重い病気により長期入院や長期療養をしている子どもの意欲を高め、学びに取り組む手助けとなる団体の活動に対して、過去7年間でのべ50団体を支援してきました。

≫支援事業例

- 学習支援
- 調査・啓発
- スポーツ・文化体験
- 病気への理解支援
- 食育

領域全体の現状と課題

難病の子ども 約15万人※1

医療的ケア児 約2万人※2

病気を理由に長期欠席した小中学生約4.4万人※3

医療の進歩とともに助かる命が増えた一方で、長期的な治療や医療的なケア（人工呼吸器による呼吸管理、たんの吸引など）が必要な子どもの学びや体験の機会が十分ではありません。成長に応じた学びや遊び、音楽や美術にふれること、家族以外の人との交流なども大切です。困難を抱える子どもの学びの必要性を多くの人々に知っていただくこと、また困難さの解決に向けた問題提起やユニークな視点を含んだ支援策、同じ課題に取り組む人たちが参考にできるモデルとなる活動を全国に普及させていくことが重要です。

※1 出典：「第1回小児慢性特定疾病対策等の基本方針検討会」（厚生労働省）
※2 出典：「第17回医療計画の見直し等に関する検討会」（厚生労働省）
※3 出典：「令和2年度児童生徒の問題行動・不登校等生徒指導上の諸課題に関する調査結果」（文部科学省）

患者である前に高校生　～就学時に長期入院が必要になった高校生の一例～

病気発症～入院生活開始

突然病気を発症した子どもはショックを受けたまま辛い治療を開始。慣れない入院生活によるストレスを抱えたり、辛い治療による見た目の変化など、心身ともに辛い状況になります。

長期の入院生活

義務教育課程ではない高校生向けの院内学級はほぼないため、休学・退学による学習空白が発生。高校は出席日数や単位履修で進級や卒業が認められるため、留年を余儀なくされる場合もあります。希望する進路を諦めるケースもあり、将来に対する不安が大きくなります。

退院～復学

退院＝病気の完治というわけではありません。退院後も通院しながら自宅療養を続け、もとの生活に戻していく場合が多いです。体力を回復させることや入院中の学習の遅れを取り戻すことだけでなく、学校や友人など周りの理解や協力を得るには、想像を超える困難さがあります。

一人ひとりの子どもの状態に寄り添った『学び』支援を病気を抱える子どもの支援の輪を広げるために

「学び」や「体験」を止めない

病気を抱える子どもたちは安定しない体調や治療への不安とともに、進学や復学ができるのかという不安も抱えています。また体調や様々な制限により、体験を諦めるケースも少なくありません。学びや体験を諦めることのない支援方法を、各団体が工夫して取り組んでいます。

CASE 01

勇者の会　≫ 学びを止めない オンラインで遠方の子どもも支援

学習支援

入院や自宅療養により遅れてしまった学習を支援するために、2017年北海道に団体を設立し、幼児から高校生まで幅広い年代の子どもたちを支援しています。学習支援場所は、札幌市内にあるホテルのレンタルルームなどを利用しています。また、オンラインによる学習支援も併用し、感染症リスクが高い病気の子どもたちが安心して学習できる環境に配慮しています。札幌まで通うことができない遠方に住む子どもたちの支援も開始するなど、学びを止めない活動を続けています。

感染症の不安がない
レンタルルームで勉強

理解者、支援者を増やす

病気を抱える子どもや家族が抱える困難さや課題について知ってもらおうと、当事者の想いや支援方法をシンポジウムなどで発信したり、参加者と意見交換をしたりしながら、理解者、支援者を増やす取り組みも多くの団体が実施しています。

CASE 02

特定非営利活動法人 i-care kids京都

病気への理解支援　食育

≫ 医療的ケア児に食べる楽しみを

i-care kids京都が運営する医療的ケア児を積極的に受け入れる小規模保育園「キコレ」では、五感を通した豊かな『食の体験』を大切にし、園庭栽培した野菜を子どもと一緒に収穫、調理するなど、食育プログラムを年間を通して実施しています。「医療的ケア児×食べること」をテーマに実施したシンポジウムでは、医療的ケア児のご家族をはじめ、保育、療育、医療、福祉、教育、行政など多様なバックグラウンドの方々が一堂に集まり、医療的ケア児が安心して楽しく「食べる」ことができる環境づくりの必要性を再確認しました。

イベントは定員
80名満員で開催

先駆的な取り組みや成功事例を全国へ：
ベネッセこども基金MeetUp開催

MeetUpの詳細は【特集1】P3

※各団体の活動内容は、ベネッセこども基金サイトからご確認いただけます。

重い病気を抱える
子どもの学び支援活動助成

活動団体紹介

一般社団法人
在宅療養ネットワーク

所在地：香川県

医療的ケアが必要な子どもたちがいる学校や保育園で、その子ども一人ひとりに合わせた症状をわかりやすく説明する紙芝居を作成。病気のことを、本人も友達も理解を促す参加型読み聞かせや保育士向け研修を実施。

代表の英（はなふさ）さん

病気への理解支援

活動内容

医療的ケア児等への理解を促す参加型オリジナル立体絵本読み聞かせによる心のバリアフリー促進教育テキスト化事業

医療的ケア児は周囲の子どもや大人の理解不足により、受け入れてもらえないケースや配慮のない言葉で傷ついてしまうことがあります。
そこで在宅療養ネットワークでは、医療的ケア児に関わる学校や園で対象児童の特性に応じたオリジナル立体絵本を用いて参加型読み聞かせ事業を実施しました。この心のバリアフリー活動で周囲の子どもや大人たちによる対象児童への関わりに改善がみられました。また香川県各地から団体への研修依頼が増えて、医療的ケア児の受け入れに積極的な学校や自治体が広がりを見せています。

課題

医療的ケア児への理解不足から生まれる周囲とのハードル

- 対応の不安などから受け入れてもらえず自宅と病院以外の居場所がない
- 配慮のない言葉を浴びたり、集団での子ども同士の交流機会が奪われたりする

解決策 1

学校や園でのオリジナル立体絵本の読み聞かせ

医療的ケア児がいる学校や園で、その子の特性に合わせたオリジナル立体絵本を作成し、読み聞かせを実施。（計9回、のべ681人参加）。絵本の仕掛けで、体の仕組みにとって医療的なケアが大切な行為であるという理解促進を行いました。園児・児童向けだけでなく、保育士・教職員向けや行政機関に働きかけ、園長・副園長研修会でも理解教育の講義を実施しました。

保育園での読み聞かせの様子

解決策 2

テキストブック配布による他地域への展開

香川県内の他地域でも心のバリアフリー活動を広げるため、テキストブックを作成·配布。現場の職員の不安を取り除くために、多くの事例や医療的ケアの特性に応じた情報を掲載。団体への研修依頼も増え、医療的ケア児を積極的に受け入れる学校や自治体が広がりを見せています。

オリジナル立体絵本の例

成果

周囲の子どもたちの変化

医療的なケアが大切な行為であることを理解し、対象児や医療器具への配慮ができるようになりました。また対象児を特別扱いせずに対等な関わりが増え、園や学校での医療的ケア実施の拒否が減少しました。

周囲の大人たちの変化

急変時の対応不安などから受け入れに負担を感じていましたが、研修後は医療的ケア児の自立に向けた取り組みに協力が得られるようになりました。自主的な研修も増え、心のバリアフリーの大切さが理解されています。